

## ボランティアで乗馬機会の提供と盲導犬訓練に打ち込む糟谷さん

横浜市馬術協会副会長として大車輪の糟谷慎作(61)さんの馬術歴は、もう22年になる。いまも毎月1回協会の仲間とともに、横浜市内の子どもたちや、身障者、老人らに乗馬の機会を提供している。時には、たつての要望により愛馬を遠方まで連れて行き、動物に触れたことがない人たちに馬に触れさせたり、乗せてあげたりしながら、彼らと愛馬を通して生き物と接する喜びを共感している。

このボランティア活動の中である時、初めて乗馬して感激した眼の不自由な方から、‘爽快だった’、‘盲導犬が自分を連れてきてくれた’という言葉と、傍で主人を忠実に待っている盲導犬を見て、元々動物好きだった糟谷さんは、健気な主従関係に心を打たれた。そのとき日本には、盲導犬の絶対数が不足していることも知らされた。そのことが4年前、自分自身背中の筋肉損傷という思いがけない大怪我をした辛い経験から、自分が何も出来ないことの無念さと悔しさを悟り、盲導犬訓練のボランティア活動に真剣に取り組み始めた。それ以来糟谷さんは、普段は西武トラベル社長という激職にありながら、乗馬機会の提供と同時に、幼いパピー犬を預り、1年間にわたり盲導犬としての基本訓練を受け、高校卒業レベルまで育てて眼の不自由な人たちのために奉仕するようになった。

糟谷さんは、愛情を注いだ犬を手放すときは、辛くて涙が両眼から溢れ出て止まらないというが、それもあくまで自分の人生観に基づいてやっていると言う。馬好きが嵩じて獣医になったお嬢さん、一緒に乗馬を楽しむ奥さんとともに、もう2度と会えない、手塩にかけ情の移った盲導候補犬との別れの辛さに、1週間前から家の中はお通夜のようなと言う。いま、育てあげたパピー犬を返し、改めて訓練を託される幼犬がやって来るのを待っている。

バイタリティー溢れる糟谷さんは別れ際にそっとささやいてくれた。パピー犬を預っていると長期出張が出来ないが、いまなら海外出張も出来ると人懐っこい笑顔を見せてくれた。